時間経過と共に原子炉融解、水素爆発となって、アメリカ、フランスに助けを求めざるを得なかったし、後にクリントン国務長官、フランス・サルコジ大統領、アリバ社総裁アンヌ・ロベルジョン氏の相次ぐ来日、わざわざお見舞いに来たわけではない、日本だけに任せていたら世界が大変だとの認識からで、もしこれ以上モタツいて収束が遅れれば原発反対の運動が激化してししまうと、原発先進国であるフランス、アメリカでは政権維持さえ困難なる、事実ドイツとスイスは原発全廃を議決した。その波が自国に及ぶのをなんとか防ぎたい、それには一刻も早く原発事故を収束しなければならない、日本だけでは無理と判断してやって来たわけで、日本に対する好意だけでやって来たわけではない。

クリントン国長官は「日本は技術的水準は高いが、冷却剤は不足しているはず」だから空軍機を使って急送したと声明を発表したが、後で国務省高官が日本政府が断ってきたので送らなかった、と発表した。

新聞には「水を送ると、アメリカ政府の申し出」と記事にあったが、冷却剤の意味は多分、ホウ酸（ホウ酸水、通常‘ボリン’と呼んでいる）ホウ酸水は核分裂反応を抑制する、いわゆる第二の制御棒に成りうるモノで注水系に使用しているのだから、想像するに水と言ったのはホウ酸水のことだと思う。またホウ酸水を注入しても廃炉にしなければ成らないほど炉内を傷付けることは決してあり得ないこと、廃炉を心配して断った、というのは何処かで挿入された言い訳でしょうか。

◎　Q：　東京電力は、東電帝国とか、幹部は完全に官僚主義だと言われていますが、どうしてですか？

A：　市井の片隅に居る私としては、東電の方とのお付合いなど全くなく、社員ではないでしょうが検針係の方くらいとしか口をきいたことがありませんから、何とも答えられませんが，巷間の噂話程度として述べます。

第二次大戦後、戦時体制は全て崩壊し、全国の電力を支配した日発は解散、電力業界も再編成となったが、東邦電力社長松永安左ヱ門氏と関東配電社長新井章治氏の主導権争いから始まった。

電力の鬼と言われた松永安左ヱ門氏は慶応大学出身、その関係で福沢諭吉先生の娘婿で初期の電力王であった福沢桃介氏に弟子入りし、桃介氏の後釜として東邦電力の社長に就任、電力の鬼と言われるような実力者になっていった。

戦後の電力再編成では松永・新井の抗争に端を発し、政界を巻き込み吉田茂総理の娘婿であり、麻生元総理の父親でもある麻生多賀吉氏、東北電力会長でＴＶドラにもなった風雲児白州次郎氏、電力の鬼松永安左ヱ門氏　に対するのは新井章治氏を中心として長野電灯社長であり信州にある全ての会社のオーナーでもある名門小坂一族、結局、民間による九電力体制の地域独占による電力会社設立に決まり、日本最大の電力会社「東京電力」が設立されたが、役員人事での人事抗争が二回戦の紛争開始、

初期の大規模電源開発の最初は戦前から計画されながら軍備拡張が優先され、資金難で開発が出来なかった只見川総合開発であった。

只見川特定地域総合開発計画で、1950 年（昭和 25 年）に施行された国土総合開発法に